

第1回「エッセー」

絵を描いているわたし

「いい趣味をお持ちですね」

私が絵を描いている時やスケッチに出かけた時、絵の具を持っていると必ずと言っていいほど、このことばがかかってくる。

続けて、「いえ、本職ですから」と応えると、相手は気まずそうに「そうですか」と言ってなかなか次のことばが出てこないようで、会話が途切れる。

たしかに趣味の延長線上ではある。高校の時、当時の絵の先生に「絵を勉強してみたい」と言ったところ、「絵でメシを食べることは大変だよ。妻に画材店を見てもらい、私も教諭ではなく講師待遇で、ようよう好きな絵を描いている」と聞かされた私は、即座に、「就職します」と言った。

以来、会社勤めをしながら絵は趣味として続けてきた。趣味だから余暇の時間で絵を描き、出来なくても誰からも責められることがない。

ところが公募展に出品しだすと、期日までに完成させなくてはならない、質も問われる。観覧料も徴収しているので、趣味の世界ではなく、プロフェッショナルとしての自負が生まれてくる。まして会社での役職が付けば時間配分も会社の仕事と絵画の両方のバランスを考えなくてはならない。そんなこんなで約20年間やってきた。

公募展に出し始めて10年が経った50歳の時、会社の先輩でもあり当時の支部長が「広島支部は解散する。自分はこの会を出るがついて来るか」と一人一人尋ねられた。ほとんどの者が「ついていく」と言っていた。しかし、私は支部長との間ですきま風が吹いていたので「やりのこしたことがあるから私はここに残ります」と同行離脱を断った。断ったものの帰宅後この会が本当に存続できるか、不安は増してきた。それで今度は個人個人に翻意するよう電話し、なんとか数人を引き戻し、現在に至っている。

七年前無事、定年を迎えると、少しばかりのコンサルタント料と絵画インストラクターの収入があるので、税務署に自由業として届けている。だからつい「本職です」と反発してみただけのことである。

でも収入の大半は年金なので、最近は「はい、とっても満たされた時間ですよ」と言うことにしている。すると次の会話が続くのである。